

学位（博士）論文要旨

理論看護学専攻	学籍番号 0733004
基礎看護学教育研究領域	氏名 山岡深雪
論文題目	慢性疼痛患者の生活の再構築を支える看護師の自己評価規準
Keywords: 慢性疼痛患者、生活の再構築、支援、自己評価、理論適用	
<p>本研究は、生活を再構築できた線維筋痛症患者と関わった医師や看護師の実践から、慢性疼痛患者の生活の再構築を支えるための自己評価指標を作成し、さらにその指標を不全感の残った自己事例に適用して検討し、慢性疼痛患者の生活の再構築を支援する看護師の自己評価規準を作成することを目的とした。</p> <p>研究対象は、生活を再構築できた線維筋痛症患者1事例の診療記録・看護記録及び主治医・看護師のインタビュー内容、及び、慢性疼痛患者3名への自己の看護実践である。</p> <p>研究方法は、「医師・看護師の認識」「医師・看護師の表現」「論理」の項目をもつ素材フォーマットを作成し、患者に変化の現れた7局面における、患者の変化に影響を及ぼしたと思われる医師や看護師の認識や表現を示す諸記録の記述内容や、医師や看護師へのインタビュー時の逐語録から、「医師・看護師の認識」「医師・看護師の表現」を示すキーセンテンスを取り出して該当欄に記入し、研究素材とした。研究素材の医師・看護師の認識と表現の意味を「論理」に記入して関わりの意味を取り出し看護実践方法論に照らして位置づけ、自己評価指標7項目を取り出した。次に、不全感の残った自己の3事例18場面をプロセスレコードに再構成し、「看護師の認識」「看護師の表現」「論理」「関わりの意味」「自己評価内容および課題」からなる自己評価フォーマットを作成した。自己評価フォーマットに沿って、場面ごとに関わりの意味を抽出し、自己評価指標に照らして自己評価をすすめた結果、すべての場面において課題を見出せた。見出せた課題の共通性を「看護師が把持しておくポイント」として抽出した後、4名の患者の共通構造を抽出して7項目の自己評価指標の全容をみつめ、「慢性疼痛患者の生活の再構築を支える看護の構造」を抽出した。「慢性疼痛患者の看護の構造」を頭において、「看護師が把持しておくポイント」の内容を吟味して共通性を取り出した結果、以下の9項目が抽出でき、9項目・22の小項目からなる自己評価規準を作成した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 痛みだけに囚われずに、全体像を描き、対象特性を描けているか（小項目3） 2. 目的意識は明確か（小項目2） 3. 患者の反応を捉えているか（小項目4） 4. 患者の苦痛に沿い、安楽を図り、患者の気持ちを支えているか（小項目1） 5. 内部環境が整って症状緩和を目指す目的に沿って患者と生活を整える取り組みができていないか（小項目3） 6. 発症し、悪化してきた生活過程を患者と共に描けているか（小項目4） 7. 退院後も患者が自力で生活調整できるよう取り組んでいるか（小項目1） 8. 家族員全員の健康状態の好転を目指した取り組みができていないか（小項目1） 9. 他職種と目的意識や情報を共有しながら協働できているか（小項目3） <p>慢性疼痛患者の生活の再構築を支えていくためには、看護が専門性を発揮して、生活面から内部環境を改善しつつ、患者と痛みが起きてきた生活過程を振りかえり調整していくことや、医療看護が互いの専門性を理解して、表象レベルで対象を共通認識し、患者自身が健康状態を好転できるように生活できることを目指して、それぞれの専門性を発揮し関わった成果や課題を患者の事実で共有しながら協働することが求められると考えられた。看護師が、この自己評価規準を用いて振り返りつつ実践していくことで、慢性疼痛患者の生活再構築を支える看護を目指して関わり続けていくことができると考えられる。</p>	

指導教員氏名（自署）：

山岡 深雪

平成 22 年 2 月 1 日

宮崎県立看護大学大学院
研究科長 薄井 坦子 様

学位論文 (修士・博士) 審査委員

主査 氏名 (自署) 薄井 坦子

副査 氏名 (自署) 丈名 明裕子

副査 氏名 (自署) 山岸 仁美

副査 氏名 (自署) 浅野 昌亮

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文 (修士・博士) の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名	山岡 深雪		学籍番号	0733004	
看護学専攻	理論看護学		指導教授氏名	薄井 坦子	
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験	合格	
論文 題目	慢性疼痛患者の生活の再構築を支える看護師の自己評価規準				
審査 要旨	<p>予備審査では、慢性疼痛患者への自己の看護実践に不全感を抱いていた時、生活を再構築できた線維筋痛症患者の存在を知り、その患者の諸記録および医師・看護師へのインタビューを重ねて自己評価指標 7 項目を抽出したこと、それを自己事例に適用した結果、対象の見つめ方が変化し、課題を見出したことが評価された。</p> <p>本論文審査では、不全感の残った自己の 3 事例 18 場面を再構成し場面ごとの意味を抽出した上で自己評価指標 7 項目に照らしたところ、すべての場面において課題を見出すことができた。それら課題の共通性から「看護師が把持しておくポイント」を抽出、それに 4 事例の共通構造と、自己評価指標 7 項目とを重ねて「慢性疼痛患者の生活の再構築を支える看護の構造」を抽出した。この構造を前提に「看護師が把持しておくポイント」の内容を再吟味した結果、9 項目・22 小項目からなる自己評価規準を作成し得た。これは、増え続けている慢性疼痛患者と関わる看護師たちの不全感を払拭し、検証する意欲をもたらしてくれる点で、理論看護学上価値ある研究として認められる。</p>				